

「共感」と「巻き込み」と「気づき」 札幌大通まちづくり(株)が関わった 「札幌オオドリ大学」の取り組み



服部 彰治 (はっとり しょうじ)
札幌大通まちづくり(株)取締役統括部長

1970年生まれ。東京都世田谷区瀬田で育ち、大学から北海道に。北海道東海大学芸術工学部建築学科（旭川校舎）出身で、1995年よりCIS計画研究所にて景観計画、屋外広告物条例の策定などに携わる。その後99年からC.S.P.T地域計画機構主任研究員として、札幌市はじめ各市町村の中心市街地活性化やまちづくりに従事。2007年5月に退社し、大通地区まちづくり協議会専任マネージャーとして、大通地区のまちづくり活動に専従する。狸小路で実施したチャレンジショップ事業、市民参加型の取り組みを展開する札幌都心にぎわいづくり事業、さっぽろシャワー通りのリニューアルコーディネートなど大通地区の大小に係るまちづくりを実施。現在は、札幌大通まちづくり(株)取締役統括部長、green bird札幌チームリーダー、札幌オオドリ大学コーディネーター、一般社団法人エリア・イノベーション・アライアンス理事。

まちづくりを実践する段階

まちづくりが、一般化してきている。まだ専門的な領域はあるにしても、普遍的な話題として語られ、活動するようになってきた。例えば、小学校の総合学習の内容として、まちづくりは必須になってきているし、大学でも「地域とのつながり」をさらに重視し、地域の活性化に関わる取り組みや講座が設けられている。さらに言えば、日常的な会話のなかで、誰もが何かしらの「まちの活性化」に関わるような話題を話すようになってきている。まちづくりが普通のこととして、自分たちのこととして語られ、具体的な取り組みが実践されている。まちづくりを系統的に整理している学問上では、いまは、理念やモデルと実験の段階から、地域の運営に関わる取り組みを実践する段階だといわれている。つまり、行政や専門家だけではなく、市民（個人）一人ひとりが主体となり、責任を持って取り組んでいく段階になったと読み解くことができるし、逆に言えば、無関心な課題や取り組み内容であれば、誰も何も動かないことを意味している。

札幌大通まちづくり(株)の役割

札幌大通まちづくり(株)は、2年間の検討期間を経て、2009年9月に設立された。都心部にある狸小路や地下街などの六つの商店街が中心となり、札幌市、札幌商工会議所など31団体・企業によって構成されている。「まちの再生を担う総合調整役」として、まちの課題解決、規制緩和、共同化などの取り組みをさまざまな分野の方々と連携し、事業を展開している。11年12月9日には、都市再生特別措置法に位置づけられている「都市再生整備推進法人」に承認され、全国初の法人となった。大通まち会社が目指し、いま実践している取り組みは、「まちへの再投資」である。

「こうした時代には、経済を犠牲にして社会的問題を解決しようとしても、その逆でも持続性のある社会への扉を開くことはできないでしょう。両者を調和させるという発想が必要だと思います。つまり、日本が抱える多くの社会的課題を解決する機能を会社の本業

に内在化させる。会社の利益と社会の利益を関連づけ、会社の事業、本業において社会的課題を解決する。ここに会社の成功する要素があり、その活動こそが真に会社の社会的責任であると言えるのではないのでしょうか」（鎌倉投信㈱代表取締役社長鎌田恭幸著『外資金融では出会えなかった日本で一番投資したい会社』から抜粋）。

今までまちへの再投資を担っていたのは、商店街やお店の方々である。1990年代から時代の変化が著しく、どこでも同じような商品を安く購入することができるようになり、わざわざ中心部で買い物をしなくてもよくなった。今までのような売上げの見込みが立たないまま、まちへの再投資を商店街やお店が担うことは難しい。まちの課題を解決し、まち会社の利益につなげ、さらに、その利益をまちに再投資するという、大きな仕組みを生み出していくのが、大通まち会社の役割である。また、まちづくりが一般化してきたことで、日常な生活の話題＝身の回りの課題を解決していくことが、市民への共感を呼び込む。このような取組みを大通まち会社が支え、新たなまちに関わる人を増やしていくことも役割の一つだと言える。

札幌オオドオリ大学の取組み

大通まち会社が関わった取組みの一つに、札幌オオドオリ大学がある。新たなまちに関わる人を生み出す取組みである。2010年2月に開校した札幌オオドオリ大学は、日常な生活の中にある話題を取り上げ、見方を変えることによる気づきを提供する取組みであり、また、自宅や職場だけではなく、共感できる人同士のつながりを生み出す場所にもなっている。現在は、1400人以上の市民が学生として登録し、女性が6割、20代～40代が7割を占める構成となっている。毎月第2土曜日に、公共施設、商業施設、カフェなどま

ちなかのさまざまな場所を使い、さまざまなテーマの授業を実施している。先生もさまざまな立場の方々が担っている。一つの授業から派生した取組みもある。ドリ農部と地図部である。ドリ農部では、農家のお手伝いから自分たちが歩いて探した野菜屋さんマップの制作など、100名以上のコミュニティを形成し、活動をしている。地図部も同様に、一つの授業をきっかけにして、参加していた学生同士の自発的な活動に展開している。誰かに言われたからではなく、自発的に、共感を持った者同士が、少しずつその輪を広げていく。この動きそのものが、札幌オオドオリ大学の持っている魅力の一つと言ってもいいかもしれない。

「共感」と「巻き込み」

まちづくりが一般化し、日常生活の話題がきっかけとなり、さまざまな活動へ展開している。活動そのものを支える人と人とのつながりは、共感と巻き込み力によって生み出されている。言うまでもなく、IT技術の向上がそのきっかけを強化していることは間違いない。さらに、社会的な課題を解決していくことがビジネスにつながり、事業を実施する組織も現れ始めている。マネジメントの重要性が改めて認識されている。でも片方で、無関心などにより、誰も関わるることができないまちの課題も存在する。札幌オオドオリ大学のような場を設けていくことが、全ての課題を解決することにつながるとは言えないが、一般化したまちづくりに、見方を変えるきっかけを提供していることは間違いない。大通まち会社が、まちに多くの人が集い、関わり、交流し、活動する場を提供していければと思う。

※ 札幌大通まちづくり(株)が実施している取組みの詳細は、<http://sapporo-odori.jp/>



映画製作裏方のワザ、ここにアリ! 睇みましょう、炊き出しましょう。三吉神社で炊き出しの授業を実施



セカイを地図から眺めてみると! 自分の住んでいる周囲の地図を書いてみました